

新年最初の 食の会開催！

2月は「逃げる」と言われますが、逃げる寸前の27日に自然再生センター事務所で開催し、25名の方にご参加いただきました。

料理の準備はいつも美味しい料理をつくっていただいている「宮内舎」さん、そして今回は東京でも腕を振るっておられた鹿糠さんが料理人として参加してくださりました！食材は食の会の柏木さんをはじめとする大根島の漁師の方々にご準備いただきました。今回の料理は、ヨコガイ・ボツカ・スズキ・メバル・コチそして幻のカキ等、地元の食材をふんだんに使っており、毎度のことながら中海からの恵みが豊富であることを実感しました。また、新規に参加される方もおられ、この食の会が自然再生センターの会員間の交流の場だけでなく、地域住民との新たな交流の場となっていることは大変嬉しいことです。これからも、地元の食材を使った「食の会」を通じて、中海の自然の恵み食する活動の拡大と会員間や地域住民とのネットワークを広げる場として開催を続けていきます。皆様の参加お待ちしております！（普及啓発担当・田中）



幻の
中海産牡蠣！

ゴージャス！な
ボッカのマリネ

大根島産の
そば粉ガレット

苦勞した里芋： 最後の収穫！

2018年度、一般財団法人セブンイレブン記念財団の助成を受けて活動している「オゴノリング大作戦」。その活動の一環で、大根島の耕作放棄地を整備し、里芋・大豆を栽培しました。

3月9日に最後の里芋収穫イベントを行い、今年度の畑での収穫は無事終了となりました。丁度満開の大塚山のお花見もすることができました。夏に雨が降らず枯れかけた時にはどうなることかと思いましたが、無事終了し、桜を見上げながらこの一年間の振り返り、感慨深い気持ちになりました。イベントにご参加くださった皆様、枝豆や大豆を購入してくださった皆様、そして畑でご指導いただいた皆様、本当にありがとうございました！（オゴノリング大作戦・中演）

ご参加いただいた皆様、ありがとうございます！来年度もより楽しい事業にしていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します！（なかはま）

【参加してくれた大学生さんから感想】里芋収穫では、立派な里芋をたくさん収穫することができました。畑の土にミミズがいて、とても良い土なのだなと感じました。また、お花見会では、満開の河津桜と共に大根島の風景や中海を臨むことができ、贅沢な時間でした。



中海自然再生 協議会の開催

第6期の最後となる中海自然再生協議会が、2月16日に自然再生センターで開催されました。協議会開催に先立ち、高安克己初代協議会会長による「中海自然再生協議会始め」と題した協議会設立10周年記念公開講演会が行われました。この講演会は、中海自然再生協議会の発足時の様子など、協議会を中心とした中海の自然再生の歩みを誰もが手軽に参照できる「中海の自然再生10年史」作成の一環として開催されたもので、34名の参加がありました。協議会では、静岡県麻機（あさはた）遊水地で開催された協議会全国会議の参加報告が会長からあり、続いて4つの実施計画のうち3つの年次報告が各担当者により行われました。※「有用二枚貝（サルボウガイ）復活を目指す事業」については、今年度は中電から実施者である再生センターへの委託がなされなかったことから、今後体制作りを進め、次年度以降中電の協力を得られる体制とするとの熊谷自然再生センター理事長の意思表示がありました。

実施計画の報告に続いて、國井会長から第7期の協議会では全体構想の見直しについて議論を進めること、そして新たに部会を設けて協議会の活性化を図りたいとの提案がありました。最後に、「自然再生協議会を対象とした社会学的評価試行業務」について國井会長より説明があり、この業務で使われている自己診断用のチェックシートへの記入を参加者全員に行ってもらいました。（國井）



まち・テラス開催

第5回は桑谷氏の「18歳成人時代の子どもたちをどう育てるか?」。将来、知識・情報・技術の変化が著しい。イマドキの子供たちには、「頑張ることをしつららない」「自分で考えよう」としない。「周り人々と関わる力がない」「耐性がない」等が指摘されています。読解力、直観力、好奇心、没頭できることを応援し、学びの機会の創出等を育てる環境を大人がつくりだすことが大切とのこと等、次世代への期待を語っていただきました。

第6回は当センターの副理事長渡部氏の「海藻回収の7年」取り組みのきっかけとそこからみえてきたもの。金融機関につとめながらも、60年代の化学肥料の農業に疑問をもち、90年代から自然食品や土壌改良のための微生物資材の開発等に携わり、自然農法国際研究開発センター菜園アドバイザーを経て、畑の土壌改良から川や海の浄化による活動に拡大をされました。近年海藻の回収とその利用事業を開始し、現在のオゴノリング事業に至ります。なお、土壌改良の成果として、2015年、世界土壌微生物オリビックで成果を証明されました。科学的知見と体験をふまえた実践が現在につながっていることに感動を覚えました(理事長・熊谷)



堀川のアカミミガメ調査 開始に向けて

松江堀川の環境を保全し、観光スポットとして魅力アップをはかるため2015年に「汽水の松江堀川」魅力アップ協議会が設立。堀川に多くの外来生物が確認され、対策が必要とされた。2019年度にホシザキグリーン財団の要請をうけて、当センターはアカミミガメを含むカメの生態調査を行う予定です。外来種アカミミガメの生態を2018年度のホシザキグリーン財団の報告書からみてみたい。アカミミガメは、常に周りを警戒しており、人の気配を感じたら素早く水中に身を隠す。在来種のクサガメやニホンイシガメは近づいても逃げない。また、ヨシのはえた土の岸辺に残る中川ではクサガメの捕獲が多く、コンクリート張りの淡水河川である比津川ではアカミミガメが多い。食性では、アカミミガメは雑食で、ヤマトシジミも含まれている。クサガメは例えば調査地点にはえているナンキンハゼの種子や植物を食す。クサガメ等在来種はアカミミガメに比べれば行動範囲が限られます。このままでは、在来種が駆逐される可能性があり、本調査は自然環境を守るうえで大切であり、皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。(理事長・熊谷)



自然再生協議会の 社会的評価

環境省の委託業務「社会的評価手法の全国での活用に向けた試行・検討業務」のため、2月7日に山口市の榎野(ふしの)川河口域・干潟自然再生協議会でヒアリングとワークショップを行いました。対象者は浮田正夫協議会会長のほか、事務局を務める山口県と山口市の各担当者で、再生センターからは前号で紹介された上サロベツ同様に小倉と國井が出席し、コーディネーター役もおなじみ金沢大学の菊地先生が務めました。ヒアリング前に榎野川河口干潟の特徴と自然再生について山口県の担当者から説明がありましたが、そのなかでは耕耘や食害を防ぐ被覆網によって地元産アサリ等が増加したという話に特に興味を持ちました。ヒアリングでは、協議会は一方通行的な報告で終わっている、参加者が固定化している、あるいはイベントには参加するが運営に関わる人がいないといった回答があり、これらは中海自然再生協議会と共通する課題であると感じました。自治体が事務局を務めている協議会は資金的に恵まれていると思っていましたので、今回、榎野川では「干潟いきもの募金」活動を開始し、また保険会社や伊藤園から寄付やボランティア活動の協力を得ているとの回答があったことは意外でした。(副理事長・協議会担当理事・國井)

